

---

# 先輩が好きです……！

紫聖

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

先輩が好きです……！

### 【Zコード】

N8124S

### 【作者名】

紫聖

### 【あらすじ】

矢野原心優、16歳、高校一年生。

やつとの思いで桜咲かせました！

憧れの秀岳館高校野球部のマネージャーになりたいです！

お暇潰しにどうぞ（\*^-^\*）

憧れの制服も少しだけ体に馴染んだ。三階の教室から見える景色も見慣れたものになつた。まだ入学してから一週間だけ。

「えつ！？マネージャー試験があるのー？」

「心優知らなかつたの？」

知らない、知らない！今話しているのはずっと一緒に親友の里佳。さばさばしてて美人。合格点ぎりぎりのあたしと違つて、頭もいい。

「野球のルールとかだよね？」

「実技あるんだって。心優は可哀想だけど、無理だよ」「

あの、満面の笑みで残酷なことを言わないで下さい。あたしはドジだ。よく転ぶし、頭によく物が当たる。ひっくり返したらいけない物をひっくり返すことも多い。お弁当とか、コップ。一番嫌な思い出はバケツ…。

服がびしょびしょになつて…………う～～、思い出したくない！

「諦めて青空下校部にしようよ。それか料理部。心優ってドジなのに、料理だけできるでしょ？」

失礼な。でも、あたしの中の七不思議がそれだ。同じ家庭科でも裁縫はかなり血を見ることになるのに。

「今から練習するんだから…！」

「スコアの付け方もだよ？」

「それは無理だよ……。」

「それに夏は暑苦しいんだから。」

「里佳、ひどい！」

「ごめんって。言い過ぎた。あ、チャイム。」

里佳のいう通り午後の授業を始まりを知らせる音が鳴り出した。授業はついつい上の空になる。

せっかく、秀岳館に入れたのに…。

野球の名門、秀岳館高校。甲子園の常連校で、過去数回の全国制覇の経験もある。貴重な春夏連覇もあつたらしくて。

高校野球好きの父親の影響か、小さい頃から夏休みはテレビの前から離れなかつた。甲子園の中の選手のプレーを見ないと、夏じゃない気さえした。

小学生になつて、野球したくて。でも、近くの少年団は男の子ばつかりで入れなかつた。今、入団してゐる弟が羨ましい。誰か女の子がいれば、多分入れた。

これは言い訳かも……。

中学生になつて女子ソフトボール部に入部。でも同じ学年は人数が多いし、あたし自身のドジさも手伝つてずっと補欠。

ベンチで声出し頑張つてた。ずっと、ずっと。居場所が無くて、肩身が狭くて。

普通科はちょっとレベルが高かつたけど、なんとか合格したのに。マネージャー試験！？

あたしは野球の試合を観たいだけなのに。

確かに全校応援だつてあるけど、+で県予選（初戦から全部）の試合だつて見逃せない。

マネージャーになつたら堂々と観戦・応援ができるのに！

野球留学の人が多い秀岳館。そのせい？か、かつこいい人が多い。だからマネージャーには女子が群がるらしい。

これは知らなかつたけど。ルールは分かる。タッチアップの説明だつて、エンドランの説明だつてできる。でも、スコアは付けられない。

わけわかんないんだもんね！

「矢野原、次問4。」

当てられた。

あ、大丈夫。なんとか……ね。

「本気？」  
「もちろん！」  
「来週だよ？」  
「マネージャーにならないと、秀岳館に入つた意味がないんだもん。」  
「まあ、頑張つてね～」  
「里佳、応援する氣ないでしょ。」  
左側を見れば、野球部専用グラウンドだ。練習してゐる……。ノック  
だ。  
どの選手も声が出てて、動きに無駄がない。なめらかで力強い。  
「…………シヨート綺麗。」  
心優の口から思わず、感嘆のため息が漏れた。  
4・6・3のゲッツーはシヨートとセカンドの呼吸が重なつてゐる。  
「きやーー！」  
耳に飛び込んできたのは、黄色い声。  
「うわ、噂の追っかけだね。SBFひつて言つたりじいけど。」  
「何それ？」  
「S y u g a k u k a n B a s e b a l l F a n C l u b の  
略。野球部のファンクラブ。創立者は不明。抜け駆け禁止、野球部  
員はみんなのもの。っていう暇人よ？」  
「里佳、聞こえるよ？」  
「王子様方に夢中で、気づいてないわよ。」

親友が腕を組みながら言つのに苦笑いをする。

あ、まだ。やっぱリショートの人が一番綺麗。ずっと見てたいかも。

「あなた達、会員かしら?」

出た!巻き髪のお姉さま!!お化粧ばっかり。睫毛がバサバサ。何より纏っているオーラが怖いです。睨まないでくださいな。

「すいませーん!もう帰ります。さよならーー!」

里佳に手を引つ張られて、再び歩き出した。

こういう時、里佳は頼りになる。

「ありがと……。」

「いえいえ。」

並んでおしゃべり。何気ないものだけど、大切な時間。

「心優、乙女だわ。」

えつ?この子は何を言い出すんだ!?

「違うつてば!」

「無自覚でよろしい。」

さつぱりわかんない。

里佳は教えて、つて言つても教えてくれない。ずっと笑つてる。

(さつきのショートのべた褒め、口に出てたの気づいてないみたいだし。初恋もまだの心優にはわかんないかな。あー、楽しみ)

ファンクラブのお姉さま方が怖くて、いつも野球部の練習を見ることは叶わなかつた。それでも、帰り道が楽しみだつた。

目で追うその人はいつも同じ。野球の神様に愛された人だと思つ。羨ましいーー!あたしは嫌わてるのに! (正しくはソフトボールの

神様に。野球とソフトボールを同じだとするのは、賛成しかねる。（）

スポーツ科2年、小野寺瞬先輩。

野球雑誌にも取り上げられたこともある凄い人。

気さくで話し安くて、人気がある。

ちなみに、この情報は全部由希菜ちゃんからですよ。あたしが調べたことではないんです……！

由希菜ちゃんは新しくできた友達の内の一人。マネージャーになりたかったらしく、でも無理だと悟り諦めたんだつて。（あたしのマネージャー試験はぎりぎり不合格だった……。）

「毎日下校中に練習見るのが楽しみなの？」

「……うん。」

「小野寺先輩と他の部員の違いとかある？」

「あるかも。」

「じゃあ、今先輩のこと考えてみて。」

「？」

由希菜ちゃんの言つてたに疑問を感じながら、素直に従つ。やつぱり素敵なプレーばかり思い出す。凄くかつこよくて、練習用ユニフォームの汚れだって計算されてるみたいで。「里佳ちゃん、もう決まりなんだけど。完璧だよ？」

「由希菜もそう思つてしまつ？」

あの、さつきから一人の言つてることがわかんない。わかんないまま一人の言葉を待つてみるけど。

「やつぱり本人に気づいてもらつた方がよくない？」

今のは里佳。

「ずっとこのままだつたらどうするの？」

次のが由希菜ちゃん。欲しい答えをくだせいいー！

そして、わざわざ場所移動。中庭のベンチ。周囲には誰もいない。

「つまり要約すると、心優は恋しかったのよ」

「…………。ちつがああう！」

「吠えないでよ。LIBFCにバレたらひるがこんだから。」

ずっと黙っていた由希菜ちゃんに助けを求めてみる、が納得してる。何で？

「あたしは一選手として、尊敬してるだけだよ！？あんな選手他に居ないから……。」

「心優ちゃんはせつしき正しく“恋する乙女”だつたよ～」「せえつたああい、ちつがああう！」

「お互い頑張ろ！心優ちゃんは「だめ。本名は。どこので誰が聞いてるか、わかんないんだから。」里佳さん、恐いのですが。正直。

「だよね……。じゃあ、ミーテンプラにするね。」

「由希菜ちゃん、ミーテンプラって何？」

今度こそ答えを…

「あたしは・・先輩の彼女になる為に頑張るからねー。ああ、またくれなかつた…………。

つて誰の！？声が小さすぎて聞こえない。

「今野圭斗先輩だよー！」

注、小声。

「本当にかつこなくてね、渋い感じが。正捕手じゃないけど、白尾先輩も油断したらその座が危ないっていうくらいの人で。通いらしこれど、猫飼ってるんだって！マスクヒミツアートっていつが前の二回。あたしギャップある人がいいんだぁ（はあと）

眩しいー！本当に好きなんだ、今野先輩のこと。

先輩の話をする由希菜ちゃんは本当にきらきらしてて、いつもより可愛く見える。恋をすると綺麗になるところのは嘘ではないんですね！

てか、マスクとマジックで、ペットにまで野球用品の名前ですか！？

それから、放課後練習する先輩を見る目はだんだん変わっていくのが自分でもわかった。

小さな憧れは少しずつ大きくなり、これが恋なのだろうかと意識する。普段の学校生活でも遠くからつい探してしまふくらい。

「瞬ー！」

SBFCの人たちが口々に名前を呼んだ。そんな人たちがほんの少し羨ましくて。でも、堂々と応援できる代わりに自由がないのは嫌だな。

今日の練習はフリーバッティングだ。

スイингは綺麗だし、何より思い切りがいい。

ボールがフェンスに勢い良く刺さるような打球。

他の選手もガンガン打つてる。外野の三方向を順々に打ちわける人も。

あつ、由希菜ちゃんの好きな人が今から打つみたい。由希菜ちゃんは泣いて言うけど、なんていうか強面で「ゴツい……！」

ちょっと怖い、かも。

あんまり理解できない……。

今日の夜ご飯何にしよう。昨日はハンバーグで洋食だつたから、和食で煮物とかがいいかな。

洼は今日少年団の練習かあ。

ご飯の準備よりお風呂を先にしよう。

あ、飛行機雲。夕焼け色の画用紙に白いクレヨン。

いつの間にか夏が来ていた。

普段の登校でも少し汗ばむ。

いつも通りの日常が出来ていた。

学校で眠気をこらえて授業を受けて、里佳と由希菜ちゃんとのお喋りを楽しんで。結局、部活にも入っていない。

いつもと違うのは、学年週番の仕事があること。

生活委員は当番が回ついたら、1年生の教室の戸締まり、消灯を確認。

それから学年週番日誌を記入。仕事内容を確認せずに委員になつたあたしがダメなんだけど……。

本音を言えば…………めんどくさいぜ、こんなにやらう。

「もう、あたしカルシウム足りてないの！？」

独り言にあたつて痛い子だわ～、と廊下の窓を閉めた。

「独り言つて寿命短くなるんだつけ……。」

ちなみにこれも独り言だつたりする。

唸りながら、日誌を書いて先生に提出。

やつと、帰れる～

浮き足立つて、帰り路につく。今日は一軍はオフらしい。（ちなみにこれも由希菜ちゃん情報。）

でも、関係ないとばかりに選手は自主練習している。バッティング

フォームの確認の素振り。ティーバッティング……その他諸々。

転がってきたボールが植え込みに隠れた。

ボールの管理は大切だ。野球はボールと野球用品が無いと出来ないんだから……！ 鞄をかわいたアスファルトに置いて手を伸ばした。もうちょっと、あと少し。手が届かない。

植え込みさん、失礼します。

軽く枝を搔き分けて、やっと手が届いた。

立ち上がった瞬間、目の前にいたのはあの人で、息が止まってしまった。

「ん、ボールありがとな。」

柔らかな笑顔と言葉。

赤くなつてないか、すごく心配しながら、ボールを手渡した。

あたしは秀岳館高校の一女生徒なわけで、由希菜ちゃんみたいに積

極的に話しに行くことも出来ないわけで。

つまりはチャンスはもうこれきりなわけで。

ダメでもいいから、とにかく伝えたら、何か変わる気がするから……。

女神様がくれた好機を無駄にしないんだから……！

「あの、先輩が好きです……！」

あたしの青くて、急ぎ過ぎにも急いだ、人生初告白。

(後書き)

思いつき短編です。

初恋にすゞく不器用な女の子を書きたくて、書かせていただきました（^O^）

最初、考えていた方向とはちょっと異なります。  
30度くらいでしょうか……？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8124s/>

---

先輩が好きです……！

2011年5月1日14時24分発行